

## 第9回立教大学諮問委員会記録

日 時：2020年3月4日（月） 16:00～18:30

場 所：太刀川記念館2階会議室

出席者：

<諮問委員> (50音順)

内田 和成（早稲田大学経営管理研究科教授、元ボストン・コンサルティング・グループ日本代表）

寺田 美穂（コニカミノルタ株式会社 DX ブランド推進部クリエイショングループグループリーダー）

春山 美樹（日産自動車株式会社日本フリート事業本部副本部長）

藤崎 斉（日本ホテル株式会社常務取締役、東京ステーションホテル総支配人）

吉田 正樹（株式会社ワタナベエンターテインメント代表取締役会長）

（ご欠席）イン克蘭 セルジオ（在日メキシコ大使館公使）

成田 純治（博報堂 DY ホールディングス取締役会長・日本広告業協会理事長）

<立教大学>

郭 洋春（総長）、野澤 正充（統括副総長）、大山 秀子（副総長）、

池田 伸子（副総長）、舛谷 鋭（副総長）、長 有紀枝（副総長）、

池田 毅（総長室長）

戸井田 和彦（学院管理担当常務理事）

（陪 席）一ノ瀬 大輔（大学教育開発センター副センター長／教学 IR 部会長）

<事務局>

菅谷 寧（総長室事務部長）、遠藤 裕子（総長室次長）、長野 香（総長室次長）、

西崎 大（総長室次長）、高山 智大（教学改革課長）、合田 景子（秘書課長）

（陪 席）古高由季（国際化推進機構課員）、樋口萌（国際化推進機構課員）

### 1. 前回の諮問委員会での指摘事項の対応状況

標記について、野澤統括副総長から以下の報告がなされた。

- |   |
|---|
| <p>① 連帯感を高めていくことを目的とした同窓会組織の充実</p> <p>② 卒業生との具体的な連携</p> <p>➡ 同窓会組織の充実のため、年4回郵送している会報だけでなく、HP、FACEBOOK や INSTAGRAM も活用するようにした。SNS では、今年度は、週に2回程度のペースで配</p> |
|---|

信を行ってきたが、さらに充実する予定である。

- ➡ 卒業生による組織として、キャリア支援ネットワークを発足しており、具体的なキャリア支援プログラムについて検討を行っている。今年度で15回目を迎える『学内OB・OG訪問会』について、従前は大学が参加企業を決めていたところ、学生アンケートの結果を踏まえて参加企業を選定する等の工夫をしている。
- ➡ WEBサイトで『立教卒業生のWorkLife』というコーナーを設け、多彩な分野の第一線で活躍する卒業生を紹介することとした。

③スピード感をもって、強いリーダーシップで決定する仕組み。

- ➡ 2019年4月に外国人留学生獲得に係るワーキンググループを設置し、入試制度及び募集計画並びにカリキュラムなど、スーパーグローバル大学創成支援事業で掲げた目標に向かって、スピード感を持って改革を進めているところである。

④立教本来の強みの分析。広報戦略。

- ➡ 部局をまたいで本学の広報戦略を立案することを目指した『広報戦略会議』を立ち上げ、1)国内広報の重点項目及び優先順位に基づいた広報戦略、予算等 2)国内広報部門及び海外広報部門の設置を見据えた組織の抜本的な見直しについて検討を始めたところである。

## 2. 本学での学修成果の調査-企業の採用活動との連携についての協議

標記について、野澤統括副総長より資料に基づいて協議の趣旨・背景について報告がなされた。続いて陪席の大学教育開発センター副センター長・教学IR部会長である一ノ瀬准教授から、参考として、本学が学生の学修成果を把握するために行っている、学習状況調査および卒業後調査について説明がなされた。さらに、一ノ瀬准教授から、事例として2016年度入学者を対象とした在学中5回の学修状況調査、および2019年度から始めた全学部を対象とした卒業後調査の結果について、報告がなされた。

### 【趣旨・背景】

中央教育審議会『2040年に向けた高等教育のグランドデザイン』の中で、『大学教育の質と学修成果を活用した採用活動の拡大などは産業界が取り組んでいくべき課題である』とし、『大学が示す可視化された学修成果に関する情報を選考活動において積極的に活用するとともに、大学における学修成果を重視しているとのメッセージを学生に対して積極的に発信することが求められる。その際には、学修成果の中身について、高等教育機関と産業界が共通理解を持って進めていく必要がある』と記載されている。

また経団連でも大学の学修成果について、

- ① 学修の成果について可視化された多面的な情報が大学から提供されるということになった際には、企業における学生の選考活動においてもこれを大いにかつ有効に活用すべきである（『今後のわが国の大学改革のあり方に関する提言（2018年6月19

日)』。

- ② 学修ポートフォリオ等により、学生が大学で何を身につけ、何が身につけていないかを可視化することが求められる。単に履修履歴のみでなく、フィールドワークや検討・調査方法など、工夫した点についてもアピールできるようにすべきである。また各科目の成績評価に加え、学部内での相対的順位の表示なども検討すべきである(『今後の採用と大学教育に関する提案(2018年12月4日)』)。

以上のように、この協議では、大学における学修成果に関する情報が、企業の就職先の採用プロセスにおいて、どうすれば有効に活用されるようになるか、大学等側が学修成果として含めるべき内容及び学修成果に関する情報の示し方等についてご意見をいただきたい。

### 【学習状況調査および卒業後調査の実施について】

本学では4年間の学び全体を通じて学生一人一人が自らのビジョンに沿って学びを選択し、自発的に学びと振り返りを繰り返しながらスモールステップを重ね、成長し、なりたい姿になれることを目指す。これを実現するためには、学生が掲げた4年間の目標およびそれに至るスモールステップの達成度に関して、学修成果を可視化することで学生に適切に提示する必要がある。また可視化結果を踏まえて学生指導や教育の改善に適切につなげる必要がある。さらに、一つ一つの学修成果を学生の学びのプロセスとして捉え、適切なフィードバックを与えることで、学生の卒業までの学びを励まし、促すことが重要である。これにより学生の学修のPDCAをより実質的に機能させることができると考える。

### <諮問委員からの意見・提案>

- ・卒業後の調査で、在学中の学びについて「在学中にどの程度身についたと思うか」「今現在の仕事や生活にどの程度役に立っていると思うか」の調査結果だが、英語の習得に関する自己評価が低いのは意外であった。ここの対策をしっかりと行うことがまず必要である。また自己評価に加えて、英語の伸長度を客観的に評価できるものを成果として開示してほしい。
- ・「転職経験の有無」のデータを見ると、立教の卒業生も転職経験が多いことがわかった。企業にしても途中で採用して、またすぐやめられてしまうと痛手である。転職を考える際にも、大学がメンターになってフォローする仕組みがあると良いのではないか。
- ・大学3年次の活動で「あなたは大学3年次に、以下のようなことを経験しましたか」という設問があるが、大学は学問だけでなく、海外体験とボランティア活動はもとより、より様々な経験を評価するようなものがあってもいいのではないか。学生にはもっと尖った部分、はみ出した部分があってもよく、これからの変化が激しい社会で生き残るには、そういったチャレンジ精神といったことも必要であろう。それも一つの学修成果として、就職活動の採用時には提示できるとよいのではないか。
- ・企業から見ると、学生は、様々な個性があったほうが、おもしろい。大学の個性が出て、

他大学の中に埋没しないのではないか。ここはだめだけれど、ここは自慢できるというものが見えない。生き残るためにも個性は必要であろう。そういう観点から見ると、この調査では他大学と比較してどうなのかが見えないので、評価しづらい。差別化という視点で調査すべきだろう。

- ・協議の趣旨である「企業の就職先の採用プロセスにおいて、有効に活用する」という観点から言うと、この学修成果の調査は自己評価なので、これをそのまま、就職先に渡すことよりも、調査設計をもっと練った方がいいだろう。またこの調査の結果と、実際の学修成果をクロス集計することで、もっと具体的に個人の能力が浮かび上がってくると思われる。

- ・この調査は他大学との差別化を図るという点では弱い。これを企業にもって行って、立教大学の客観的な評価を聞いてみてはどうか。様々な規模の企業における本学卒業生の評価を他大学卒業生と比較してどうなのかということを知るとよい。

- ・雑誌で大学の比較検討の記事が出ていたが、「国際性」の観点において立教は高い評価を得ていた。外にベンチマークを設けることは大変重要であり、そこに対して、立教のポジションを確認し、強みがどこにあるのか認識することが大事である。

- ・この調査の「他大学出身者と比べて優れていると感じられる点」を見ると、まさに立教らしい記述が見られる。「自分本位ではなく、他者を認められる人が多い」「人と人をつなげる役割ができる」「与えられたものをやるのではなく、課題を見つけて自ら動く点」などはまさに立教生である。これらは今後の時代には本当に大切なものである。答えがないことを解決していかなければいけない時代で、こういった人材が役割として非常に大きくなっていく。業種によって違いはあるが、企業の採用でいうと、一昔前は体育会の主将がほしかったが、いまは寮長がほしいと言われている。カリスマ的な人材とは違った人材もこれからの時代に求められるだろう。派手さはないが、そこが立教大学の強みであり良さである。

- ・調査は学修成果の自己評価になっているが、立教大学の学生、卒業生は低く評価している傾向があり、謙虚であるといえるのかもしれないが、一方で、他大学に勝ちたいという気持ちも大切である。自分たちがどの領域で輝き勝つのか、挑戦する姿勢は必要であり、そういう気持ちを持たせる仕掛けが大学に必要なのではないか。

- ・学修成果をどう採用プロセスに組み込むかという点で、理系ならともかく文系は成果の判定が難しい。現在の新卒採用は、おおよそ適性試験・面接という流れで、学修成果を測るものとしては成績証明書ぐらいしかない。企業が文系の学生に求めているのは、授業の成績がいいといったようなことではない。学生に有してほしいコアコンピタンスを定め、それを成果として示すようにしてはどうか。

- ・面接をたくさんしてきた経験から言うと、学部学科が特殊な名称が多く、説明が難しく理解できない。学問の話、尖った部分の話をつわりやすく区切って、大学時代の学修成果として提示できる仕組みを作り、学生に提案の訓練をすることが必要であろう。

- ・アビリティとコンピテンシーは二軸でいったほうがいい。企業では、採用評価も年次評価も、この二軸+ $\alpha$ で行っており、これを学生の採用活動にも応用させたい。

### 3. スーパーグローバル大学創成支援事業中間評価

標記の件について、本学独自の中間評価を諮問委員会において実施するにあたり、池田伸子副総長より、スーパーグローバル大学創成支援事業（以下、TGU）に係る本学の取組み及び進捗等について、資料に基づき以下の説明がなされた。

- ① TGU 事業について
- ② 諮問委員会による中間評価の目的
- ③ 第1回中間評価結果
- ④ TGU 事業における本学の取組と進捗状況（第1回中間評価結果指摘事項への対応含む）
  - 《カリキュラムの改革》
    - ◆ グローバル教養副専攻
    - ◆ Global Liberal Arts Program
    - ◆ 国際連携大学院プログラム
    - ◆ 英語カリキュラム改革
  - 《学生意識の改革》
    - ◆ 学生の海外派遣（協定大学数、プログラム数、留学経験者の割合）
    - ◆ 多様な外国人留学生の受入れ（短期プログラムの拡充、優秀な正規留学生受け入れに向けたカリキュラム・入試改革）
  - 《ガバナンスの改革》
    - ◆ 中長期計画の策定（「立教グローバル戦略2.0」（総合発展基本構想））
    - ◆ 国際化推進会議（機構）による迅速な意思決定
    - ◆ 入試改革（4技能を評価する英語資格・検定試験を活用した入試の全面導入）
    - ◆ 教育の質保証（ナンバリング、シラバスの英語化実施）
    - ◆ 政支援期間終了後の自走化に向けた取組み（大学の中長期計画との連携）
    - ◆ 教職員の多様化・高度化（外国籍及び外国学位取得者の割合、外国語運用能力）

#### <諮問委員からの意見・提案>

・留学生を増やす、英語による授業を増やす、など、各 KPI を達成したのちにどのような人材が輩出されていくのかという具体的な人材像や、立教大学の取組の特徴をより明確化できるとなおい。

・全体の評価結果を見ると、大学の規模による不利な状況も考えられる。特に大規模大学では、入学時に特定の分野への興味・関心がまだ確立されていない学生が多い中で、「グローバル教養副専攻」では、自身の専攻に加え、さらにもう1分野の体系と英語が掛け合わされ、学生の視点に立つと、相当ハードルが高いという印象がある。登録者数の改善に向けて、英語で日本を紹介する動画コンテンツの作成など、学生が面白みをもって取り組める、学生が

すすんで取り組みたいと思えるようハードルを下げる工夫が大事である。また、「グローバル=英語」という立て付けになっているが、経済におけるグローバルスタンダードは米国、中国とダブルスタンダードの状況にある。英語圏だけでなく、“アジア”を含め、より幅広い視野を持ったカリキュラム構成としてはどうか。

- ・学生において、そもそも“グローバルに活躍する人材”になりたいというニーズは確実にある。グローバル教養副専攻の登録者数の改善に向けては、学生側の事情やニーズを丁寧に分析する必要がある。グローバル教養副専攻が、グローバルにビジネスで活躍できる人材になれる、というコースとして、学生にとってのメリットをより明確にする必要がある。

- ・グローバル教養副専攻のテーマは、より大学としての特色を打ち出せるような設定にしてはどうか。例えば“観光”など、学生が自身の体験から得たことを、テーマを設定して体系的にまとめてあげることが、十分に大学での学びとして評価できる面があるのではないか。

- ・英語外部試験は、国際的なスタンダードとして認知され、的確に評価できる指標であることに間違いはない。大学の特色として、カリキュラム改革との関連性等について積極的に発信し、取り組みをつづけてほしい。

- ・意欲や必要性などから、学生の行動を引き出していく仕掛け作りが重要。1つの分野については、何事も十分な時間を費やせば、1/100人くらいのエキスパートにはなれる。そこからさらに1万分の1になるために、1/100×1/100をするイメージで、学生の得意分野、個性を伸ばしていけるようなものとして、グローバル教養副専攻を捉えて行ったらよいのではないか。

- ・立教大学はかねてから学部間の垣根が低く、多様な分野についての知見を広げていける仕組みがある。グローバル教養副専攻はまさにその理念を再構築したものである。

- ・所在地である“池袋”もまさに変革期にあり、大きなポテンシャルを持っているので、その点も強みとして活かすような取り組みも積極的に取り組んでほしい。

#### 4. 総長からの総括

「今回は「企業の採用活動における学修成果の反映について」と「スーパーグローバル大学創成支援事業の中間報告」の二つの観点からご意見をいただいた。我々大学人では考え付かない、思いもよらないような知見、アイデアをいただいた。これらを少しでも、大学運営、カリキュラム等に生かせるよう努力していきたいと考えている。次回の諮問委員会時にその結果をご報告したい。」と郭総長より総括があり、終了した。

以上